

2021年6月6日 久宝教会 聖霊降臨節第3主日礼拝

メッセージ「Wanted!」

岡嶋千宙伝道師

聖書 サムエル記 上 8章 16-22節

最近、テレビや新聞などのニュースで、よく触れる言葉があります。「安全と安心」。どこかの保険会社の売り文句のような言葉ですが、それを発しているのは日本の行政の長であり、また首都東京の行政トップであったりします。「安全で安心なオリンピック／パラリンピックを!」ですが、その声が響いているわたしたちの日常は、「安全と安心」とはほど遠い状況です。コロナウィルスの急速な感染拡大により、日本だけではなく世界全体で、人類がこれまでに経験したことのない危機に直面しています。最近になり、欧米の国々を中心に、ワクチン接種による感染減少の傾向が見られるようになりましたが、全体的に見れば、収束に向かって「安全安心が確保された」といえる状態になるにはまだまだ先が遠いというのが現実です。

だからこそ、なのでしょう。「安全で安心な!」と語る人たちは、より一層にその声を高めているように聞こえます。ウィルスの脅威により、「生きる」ことが当たり前ではなくなっている日常において、わたしたちの不安は大きく、また多くなっています。それに連れて、何か一つでも安心できるもの、不安を消し去ってくれるもの、明るい未来を見させてくれるものが欲しい。そんな気持ちが「安全で安心なオリンピック／パラリンピック」というキャッチフレーズを繰り返させているのかもしれませんが。命の危機に直面し、不安の中に生きざるを得ないような状況にあって、何か確実なものを求める、というのは、今に始まったことではありません。そして、また、その求めに対して、「これこそがわたしたちに安心と安全をあたえてくれるものです」という声が響くのも、同じです。

本日、わたしたちに与えられた御言葉、サムエル記上 8章にも、そのような人々の心の動き、そしてそれに伴う声が響いています。この箇所は、イスラエルにおいて、王国が成立するきっかけとなった出来事を描くものです。今から 3000 年ほど前、紀元前 1030 年頃のことです。イスラエルというのは、もともとはパレスチナの山岳地帯に分散する様々な集団が、それぞれに自主性を保ちながら、「ヤハウェ」という神への信仰を共有することで、緩やかにつながり合う部族連合のようなものだったと考えられています。当時の人々に、一つの国家という意識はなく、また実体としてのイスラエル国家というものも存在しませんでした。その部族連合が、「創世記」や「出エジプト記」「ヨシュア記」などにも記されている人口増加と、それに伴う居住地の拡大によって、徐々に中央集権的な社会構造を導入せざるを得なくなります。人口の増加と山岳地帯以外への居住地の拡大は、人々の職業と生活形態

にも変化をもたらしました。かつては比較的狭い領域で、羊飼いと生活していた人々は、移住した土地で農耕生活をするようになり、さらに、周辺地域との交流により、商業的な活動にも従事するようになっていきます。家族単位で行っていた牧羊の生活から、いくつかの家族にまたがって生じる共同作業、あるいは分業を伴う生活へと変化していきます。このような変化の中で、人々の間に様々な確執や争いが起こっていったことは容易に想像できます。本日の聖書箇所の前部分には、王制が始まる前にイスラエルの指導者であった2人、エリとサムエルが登場しますが、彼らの息子たちは、どちらも「不正を働いていた」ということが記されています(サムエル上 2:12-26, 8:1-3)。これは、イスラエルが、比較的小さな領域で諸部族が緩いつながりを持っていた状態から、複雑で多様な構造を伴う社会へと変化していく中で、内部に混乱を抱えていたことを示しています。

そのような内部の混乱に加え、外的な圧力もありました。ペリシテ人の脅威です。ギリシア地方から中東に移住してきたペリシテ人は、イスラエルなどの中東の伝統とは異なる文化／生活形態を持つ人たちでした。際立っていたのは、軍隊組織の違いです。ペリシテ人は、職業軍人を有し、「鉄の精錬」とよばれる強力な軍隊で、特に、地中海沿岸部で勢力を伸ばしていました。「士師記」には、このペリシテ人と、イスラエルの民とが争った出来事が記されており、幾度かイスラエルがペリシテ人に敗北を喫し、領土を失ったことが記されています。内的な混乱と外からの圧力により、時に命を失うほどの危機を迎え、生活圏を失い、生きることすらまなくなるとなる。そんな危機を乗り越えるための道として選ばれたのが、「王」という存在でした。

本日の箇所の少し前、8章5節には、民が王を求めた理由が次のように記されています。「他のすべての国々のように、我々を裁く王を立ててください」。また、8章20節では、同じように、「すべての国々と同様、我々を治める王が必要であり、王が陣頭に立って進み、我々のために戦の指揮を執るのです」と述べられています。5節は、その直前に、サムエルの二人の息子たちが不正を行っていることに対しての民の苦情が述べられていることから、裁き主、つまり、イスラエル社会内部の混乱を治める統治者としての王が求められていると考えられます。他方で、20節には「王は先頭に立って戦う」とあるので、外部の敵に対抗する軍事的リーダーとしての王が求められています。内政の統治者であれ、軍事的なリーダーであれ、王という存在は、それまで、イスラエルの民が抱いていた信仰に反するものでした。彼らの信仰、ヤハウエ信仰は、神ヤハウエこそが唯一の救い主であり、その神以外に正しい裁きを行い、戦いに勝利をもたらす存在はいないとするものです。従って、神に代わり、王という人間によって救いを得ようとする発想は、それまでの信仰とは相

容れない、水と油のようなものであったと考えられます。

それにもかかわらず、王が求められたのは、よほど、緊迫した状況だったからでしょう。一人ひとりの日常が、命が、脅かされていた。だから、神も、人々を生かすために、民の求めを聞き入れた……。ただし、人々の言葉を聞き入れた神は、その求めに無条件に応じたわけではありませんでした。8章 11 節から 18 節において、神は、サムエルを通して、「王の権利」を伝えさせています。民が求める王とはどういう存在なのか、王がいることで人々の生活がどう変わるのか。サムエルによって伝えられた、この神の言葉において、着目すべきこと。それは、神が、「あなたがた」と呼びかけられている人たちではなく、その人たちと関係を持つ人やものについて多く語っているということです。

神の言葉を直接に聞き、神により「あなたがた」と呼びかけられているのは、イスラエルの民、中でも、社会的な地位を有する人たちであったと考えられます。当然に、男性であり、しかも、それぞれの家の長、家長であったはずで、先ほど見た通り、当時は人口増加と領地拡大が進んでいたことを考慮すれば、すべての家族から一人の家長が一箇所に集うとは考えられないので、家長の中でも代表者、4 節では「長老」と記されていますが、その長老を含めた幾人かの有力者たちであったことでしょう。その有力者である「あなたがた」に関して、神の言葉の中では、ほぼ何も言われていません。語りの終わりの方で、「こうして、あなたがたは王の奴隷となる」と短く記されているだけです。これは、それより前に、「あなたがたの娘、息子、畑、収穫物、奴隷、若者、家畜」がどうなるのかが具体的に記されているのとは対象的です。息子は兵士として徴用され、戦いの前線に送られる。娘は王のお腹を満たす召し使いとして働かされる。畑、収穫物、家畜、奴隷は王やその家臣を喜ばすために没収される。王をいただくこと、それは、民に連なる人やものたちがすべて王のために取り去られていくことだと言われるのです。権力も地位も有しない多くの人やものたちの犠牲の上に成り立つ王国という制度。

神が、「あなたがた」ではなく、「あなたがた」に連なる人やものたちについて語るのには、表舞台で、大きな声を発しながら、神の使いであるサムエルの前に立つことのできる有力者たちの背後に、小さくされ、犠牲にされていく人やものたちの存在があるからです。この場面の中で、一番大きく響いているのは、もちろん、「あなたがた」と呼ばれる「民」の声です。8 章の冒頭から見ると、合計で 4 回、「声」という言葉が用いられていますが、そのうち 3 回が、民、つまりその場に居合わせた「あなたがた」の声で、しかもその声は、聞かれるべきものとされています（サムエル上 8:7,9,22）。残り 1 回がサムエルの声で、これは民によって「聞かれなかった」と

されています(サムエル上 8:19)。聞かれなかったサムエルの声。それは、先ほど見たとおり、神が民に向けた言葉を語った声です。つまり、そこで語られた人やものたちの存在が、民によって、ここでは「あなたがた」とされる有力者たちによって、打ち消されたのです。

「娘、息子、畑、収穫物、奴隷、家畜」。社会の表舞台に出てくることなく、小さくされ、声をあげることのできないものたち。そのものたちと共にいる。そのものたちの声に耳を傾ける。この場面では、「あなたがた」には、聞き入れられなかった声ですが、王国樹立後も、神は、そのものたちの声を聴き続け、そのものたちと共に歩み続けました。それは「サムエル記」の後の記述において、「あなたがた」ではなく、女性たちが、しかも王によって拒否され、虐げられた女性たちが、イスラエルの歴史の中で重要な役割を果たす人物として登場していること、あるいは、イザヤ、エレミヤ、アモスなどの後の時代の預言者たちによって、「弱い者」や「貧しい者」を虐げる支配者階級が批判されていることなどからも明らかです(例えば、イザヤ 1:23, 10:1-2, エレミヤ 5:26-28, アモス 2:6, 9:4)。

「言葉を発することを許されず、社会の中で小さくされている者たち。その者たちの声に耳を傾けよ。その声を決して忘れるな」王国が成立する直前に、神がサムエルの口を通して伝えたこのメッセージは、王国の興隆と滅亡を経て、約1000年後に、生身の身体を持った一人の人、ナザレのイエスに引き継がれました。イエスと同時代に生きた人々は、かつてイスラエルの民が王を求めたのと同じように、新しいユダヤの王を求め、「イエスこそが、その王なのだ」という期待を抱いていました。しかし、イエスは人々の抱いていた「王」のイメージを180度転換させます。小さき者たちの犠牲の上に成り立つ王ではなく、小さき者たちと共にあり、共に歩む王。それが、イエスの示した王の姿であり、サムエルを通して、預言者たちを通して、またイエスを通して、イスラエルの民に、そしてわたしたちに示されている、万物の王たる神の姿なのです。

不安な世の中であって、高らかに語られ響く言葉に、つい身を寄せてしまいたくなります。不安におびえるのではなく、「安心、安全」と思われるものにすがりたくなります。しかし、高らかに鳴り響く言葉の背後に、言葉にならない声があること、生身の身体をもった一人ひとりのつぶやきが、溜息が、そして、命があることをわたしたちは忘れてはならないでしょう。かつて、わたしたちの主イエスがそうしたように。わたしたちは、小さく揺れる声に、ほのかに輝く命の炎に、今このときに抱かれている一つ一つの思いに、耳を傾け、目を向け、身を寄せ、共に歩むのです。